

第 28 回 歴史リレー講座「近世大和の風情」 岡本 彰夫氏 (H29.1.22)

南都（現在の県庁周辺）は古来より現代まで宮廷と密接な関わりを保っています。応仁の乱による混乱で奈良に逃れてきた人々は力を蓄えたのち京都に戻りましたし、藤原氏の子息の中には奈良で僧になった人もいます。京都が現代まで存続できるのは、武家文化と宮家文化、さらに独自の文化を併せ持つ南都のおかげです。また、京都と違って歴史の中で切れ間なく続く大和の伝統文化・儀式はもっと誇ってよいものです。

奈良奉行所関係の記録集『南都雑録』（享保 13 年）によると、春日大社と興福寺は江戸時代までは一体の存在で、石高は約 2 万 1 千。伊勢神宮、日光東照宮に次いで 3 番目の規模でした。約 2 万 1 千石のうちほとんどは興福寺領で全国に領地を抱えていました。興福寺の別当には両門跡（一乗院と大乗院）が交替で就任しました。一乗院は宮家で、大乗院は近衛、九條、鷹司、一條、二條などの摂家。序列では一乗院が上ですが、京都のしきたりでは実際に力を持つのは大乗院です。そして門跡直属の四院家（喜多院、松林院、修南院、東北院）、その下に諸院諸房が続きます。

公家にもランクがあり、宮中で席次にも歴然たる差が見られました。上から摂家、^{せいが}清華家、大臣家、名家、^{うりん}羽林家、^{へいげ}平家の順です。当時は公家も武家も出世こそが人生の目標でした。ちなみに、女官に出世できるのは名家と羽林家、平家の娘のみで「お局様」と呼ばれたのがこの女性たちです。

江戸時代、^{てんそう}伝奏という役職を通さなければ天皇との会話は許されません。ところが、春日社興福寺は別格の扱いで、^{なんそう}勤学院（藤原氏の学問所）内の南曹という役所経由で即座に関白へ話が通じました。また、天皇が御所で内々に祈禱することを勅命祈禱といいます。もちろん特別なしきたりがあり、神主は自宅に女官から消息（手紙）が届き次第、ただちに宮廷に駆けつけ、「^{なでもの}お撫物」（中身は秘中の秘）を大切に持ち帰って祈禱を行いました。

京都の西本願寺が慶応元年に作成した『雲上明覧大全』を見ると、当年の興福寺別当は大乗院門跡の隆芳。^{りゅうほう}先の関白九條尚忠公の子、姉は孝明天皇に嫁いだ^{あきこ}夙子という由緒正しい血筋です。一方、一乗院門跡は^{おうしやう}應昭とあります。この年には宮家の適任者がおらず、この人は先の関白近衛忠熙公の子です。あまり知られていませんが、大河ドラマで話題になった天璋院篤姫は應昭の系図上の妹にあたります。

『南都雑録』の「興福寺末寺一覧」では、奈良の寺は一乗院末寺、大乗院末寺、興福寺末寺と 3 種類に分類されています。法隆寺や唐招提寺でさえ末寺として扱われていることから、当時の興福寺の偉大さが想像できます。ところが、明治になって興福寺のど真ん中に大道が造られ、寺は分断されてしまいました。また、「興福寺坊舎知行の事」には 100 以上の子院名が並ぶものの、明治にすべて廃寺と化しました。その中の世尊院は現在、「国際奈良学セミナーハウス」として活用されています。明治維新で消え去った遺産がもし無事であったなら、今頃は国宝がもっと増えているはずです。

ところで、日本三大^{ちよくさい}勅祭（天皇の勅使による神社の祭祀）といえば、葵祭（上賀茂神社、下鴨神社）、石清水祭（石清水八幡宮）、そして春日祭（春日大社）。いずれも平安時代から続きますが、葵祭は 192 年間、石清水祭は 214 年間にわたって途絶えた時期があります。ところが、春日祭だけは現在まで一度たりとも断絶していません。同様にお水取りも、おん祭りも連綿と続いています。応仁の乱の影響で宮廷からの使いがなかった期間にも独自の裁量で祭を執り行っていたからでしょう。

いつの時代においても、しきたりや祭り、年中行事などの儀式は重要です。言葉では消え去ってしましますが、目に見える形で遺せば後世まで受け継がれます。一見、形式的に思える儀式の中に人のまごころや思いやりなどの温かいメッセージが込められていることも心に留めておいてください。

近世 大和の風情

幕末の宮廷と奈良

神主・奈良県立大学客員教授 岡本彰夫

一、奈良と宮廷

①社寺領（享保十三年『南都雜錄』より）

春日社興福寺 二万一千百拾九石五斗（内神供田一五五四石余 社家方
燈明田一六五一石余 備宜方）

東大寺 三一四〇石 山村御殿円照寺 三〇〇石 中宮寺 四六石

法華寺 二二〇石 元興寺 五〇石 新薬師寺 一〇〇石 長谷寺 五〇〇石

壺坂寺 五〇石 多武峰 三〇〇〇石 内山永久寺 九七〇石

室生寺 一〇〇石 三輪社 六〇石 信貴山 無 秋篠寺 一〇〇石

嘗麻寺 三〇〇石 西大寺 三〇〇石 薬師寺 三〇〇石 吉野山 一〇一三石

（参考 伊勢神宮 五万石

日光東照宮（元禄十四年）二万四千六百七石八斗四升三合）

②興福寺

※資料① 大乗院庭苑四季眺望真景

◎両門跡（一乗院・大乗院） 四院家（喜多院・松林院・修南院・東北院）

諸院諸坊

※資料②『雲上明覧』

◎末寺と子院

※資料③『南都雜錄』

③春日社と宮廷

◎春日祭

◎南曹

◎勅命祈祷

※資料④『大和古物漫遊』

典侍局 内侍局 命婦

摂家 清華家 大臣家 名家 羽林家 平家

（参考）宮中の席次

・摂政・関白・准三宮（皇后宮・皇太后宮・太皇太后宮）

・太政大臣・左大臣・右大臣・准三宮（宮門跡・摂家門跡の准宮）

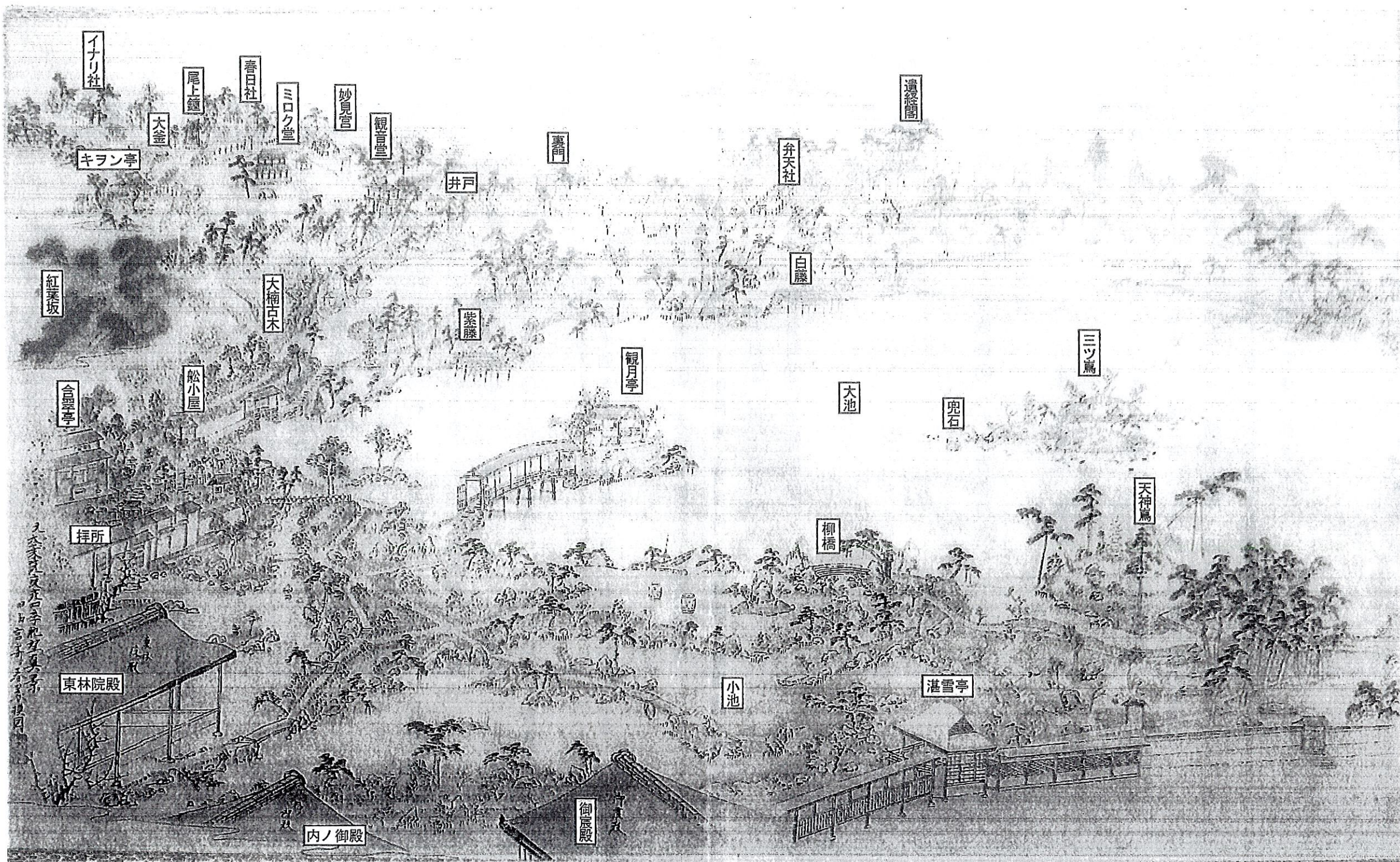
・皇族・前太政大臣・前左大臣・前右大臣・内大臣

・前内大臣・准大臣・従一位・権大納言・前権大納言

・権中納言・前権中納言・参議・前参議

◎社家の官位

五位立ち 五歳従五位下 三〜五年で累進



大元乗院庭苑 四翠模図 眺望眞景

御領九百五十石
南嶺
寺飛鳥御殿
御里坊
製米町
佐壽將監
御宗旨法相
大乗院御門跡隆芳
二十六
前大僧正法印
興福寺別當
九條兼國白尚忠公荷子

御印二通
 院家
 上乘院推僧具法印
 松林院大僧都法印
 御羽織袍色
 續泊十
 世尊院大僧都清
 信信
 坊宮
 多門院法印
 相智院法印
 松林院法印
 福智院法印
 多門院法印
 南院中務卿
 原遠江守
 同伊勢守
 杉田和泉守
 上田源守
 市司芳法橋

一乘院御門跡	定昭大僧都	定好已講	覺信大僧正	信圓大僧正	信昭大僧正	良信大僧正	玄圓法親王	玄昭得業	信玄得業	尊旁大僧正
	云紀元報令二十位入藏部藏家公九世按政關口 太政大臣定平公三男小僧在入臣神戶公息	真範僧正	靈覺僧正	我圓大僧正	隆信得師	良覺大僧正	實靈少僧都	良兼雅僧正	良譽大僧正	人道尊覺親王
		賴信權僧正	寬英少僧都	實信大僧正	寬惠禪師	信助得業	良玄大僧正	聖圓大僧正	寬善大僧正	人道尊敬親王
		賴尊大僧正	覺樂大僧正	實靜少僧都	寬昭大僧正	寬實大僧正	梁昭大僧正	教玄大僧正	寬慶 六邊俗 榮冠公	人道尊昭親王


御願寺四百九十二番南前
御堂後德永節西長前
鎌倉司海監

御宗吉法相普橋師尊
兼院衙門跡應昭十八

大僧部法印
近衛春國通念公御子芳信
鳥家
修國僧部法印
寺多院念經都督
院宣

押部印
白上り


御興瑞衣
花色小紋
御戸印
佐侶
觀世音菩薩部法印
賢聖院大僧部法印
空壽院俗部法印
侍
朝岡

新田犯候奇
中沼但馬守
薙氣
高太治部卿
二藤法指
北小島判官
中沼權輔助

義尋禪師	經尋大僧正	尋尊大僧正	覺尊大僧正	尊信恭僧正	實尊大僧正	顏實雅僧都	隆禪持大僧都	大乘院御門跡
	尋圓大僧正	孝信少僧都	聖結恭僧都	慈信大僧正	圓實大僧正	季範大僧正	天兒屋授命二十一世太藏冠發足公十世九條若大臣師會金男訓白太學司兼通公位滿充少將殿祿朝臣息	堀河院寬治元年三月 隆禪持大僧都御座立
信尊大僧正	尋憲大僧正	尋尊大僧正	孝覺大僧正	尋覺大僧正	實信大僧正	信圓大僧正		
信雅大僧正		尋實禪師	孝尋大僧正					

「興福寺末寺一覽」

(福智院旧蔵)

一衆院內門跡末寺
清水寺
淨瑠璃寺
神臺寺
岩舟寺
竜蓋寺
竜服寺
松尾寺
忍辱寺
在原寺
金剛山
喜光寺
中川寺
般若寺
不退寺
信貢山
富貴寺
鸛松寺
金勝寺
千光寺
慈明寺
靈山寺
南法花寺

門月四日四日四日四日四日四日四日四日四日四日
十市郡 高市郡 添下郡 平群郡 桑上郡 山迎郡 添下郡 山迎郡 和同郡 相樂郡

葛井寺 野中寺 德林寺 久空寺 弘慈寺 烏坂寺 樂音寺 德泉寺 百壽寺 靜勝寺 國弘寺 延福寺 區念寺 仙洞寺 百壽寺 崇樂寺 長安寺 竹樹寺 正近寺 到復岸寺

知州 河州 城州
 知州 高平 市群
 市群 市群 市群
 市群 市群 市群

安位寺
新淨土寺
新福壽寺
正法寺
內樂寺
已心光院
看智光院
指捨曳
極樂寺
伏見寺
與福壽寺
法隆寺
西大寺
法花寺
弟提寺
新榮師寺
不空院
祇園寺
知足院

[illegible]

現光

藏州祖業部
和州高下部

大衆院印門跡末寺
長岳寺
平等寺
永久寺
菩提山
信貴山
長谷寺
大麥寺
茶師寺
隨願寺
萱尾寺
法言寺
言田寺
中樂山
極樂坊
新禪院
禪智院
禪智院
法真寺

同	日	日	日	日	日	日	和	城	日	日	日	日	日	日	和
式	高		添		訓		訓	澤	添	式	手	添	山		訓
下	市		上		式		式	下	上	上	上	上	上		上
郡	郡		郡		郡		郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡		郡

眉間寺 白毫寺 海鏡寺 正覺寺 欽福寺 大福寺 寧壽寺 室生寺 金峯山寺 飛鳥寺 富貴寺 真山寺 明王院 紫山寺 高麗寺 辯麻寺 置忍寺 高天寺 明王寺 牟羅寺 雪別所

同同同同同同同同同同同同
別
葛宇
下智
郡郡
郡郡

十 駱 崔 明 吳 薛 伍 禪 意
駱 尾 郭 祿 來 曰 光 穿 泉
寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

根成身院
永福寺
海住山
廣養寺
安養寺
龍谷寺
西玄尾
笠置山
警峯山
安養寺
善勝院
平等院
三寶戶
勸學寺
三樂寺
日野寺
神護寺
長寬寺

同和同城	同和同城	同和同城	同和同城
州州	州州	州州	州州
廣高	平式	寧添	寧添
瀨市	弄上	陸上	陸上
屏郡	郡郡	郡郡	郡郡

和州言華郡

和州添上郎

興福寺坊舎知行之書

5.

勅命祈禱（ちよくめいきとう）

昔は勅命の御祈禱というものは頻々とあったことで、正式なルートを踏めば勅使が立ち、大勢の供を率いて社寺へ参向されることとなる。こんな大仰なことを避けるために、内々で御祈禱をなされたものである。その方法は宮中の「御内儀」つまり「女房」方（女官）より「消息」（手紙）が届けられ、「お撫物」というお品を預かって執行したのである。

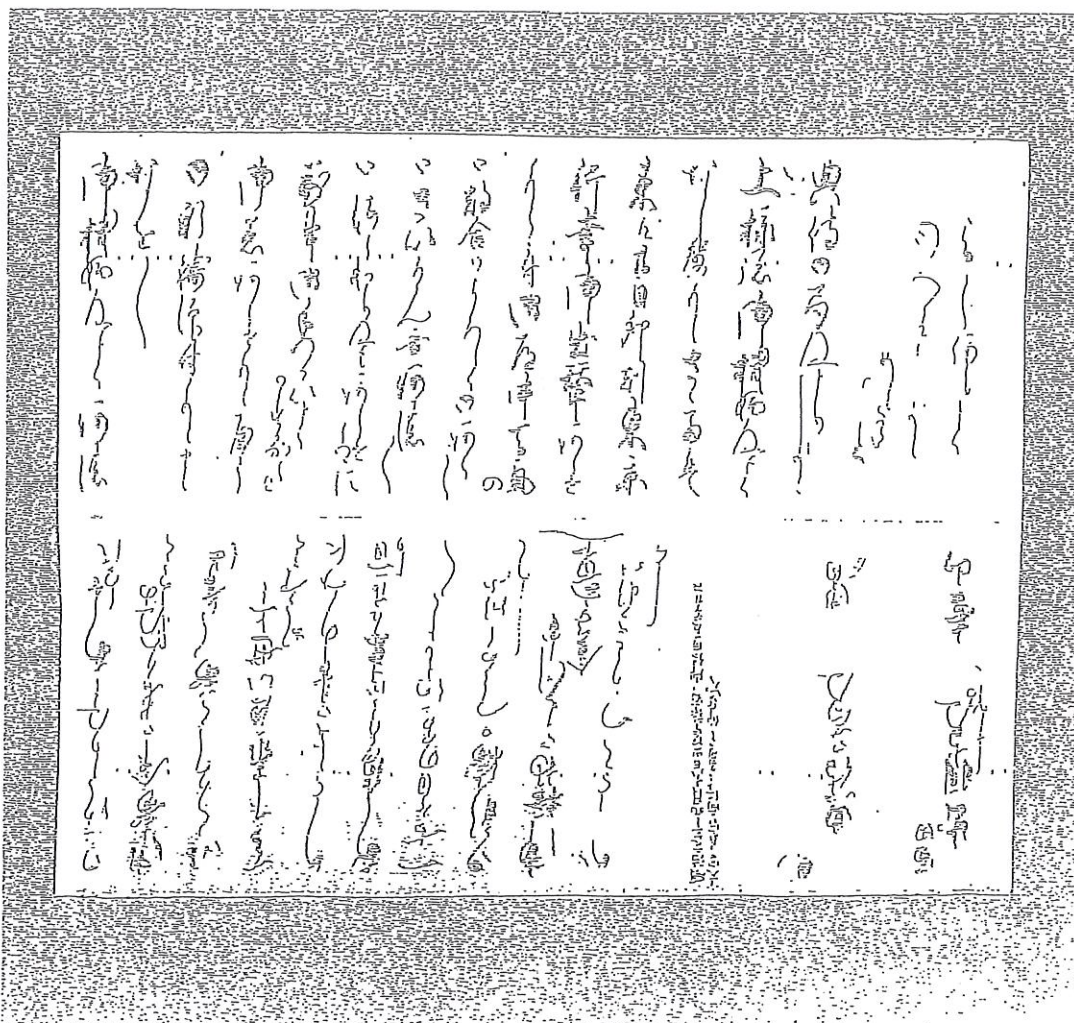
そもそも宮中の御内儀には、華族さんの中でも羽林家（近衛の中・少将を経て権大納言まで累進する家）や名家（五位の侍従から弁官を経て権大納言まで累進する家）クラスの家から上がられる女官方を「典侍」といい、それより一段下の堂上家（いわゆる殿上人で清涼殿の殿上之間に入れる人々）である平家（平公家）より出られる方を「掌侍」といい、以上を総称して「お局様」と呼ぶ。典侍局は七人。一番上席が奥向けの女官のお頭で大典侍。これは定まって置かれる職。他に新大典侍、権中納言典侍、宰相典侍、按察使典侍というような職名であるが、必ずしもこの名称とは限らない。しかし下の二人は新典侍と今参（新参の意）と決まっている。掌侍の方はというと、お頭は長橋局と申され官位で言うとう勾当内侍。この職が外と内との取り次ぎの要人で、御内儀から外へ出る御使はすべて長橋局より執次に命じて使番を出され、外に対する一番の権限を持つ。ここは四人で、時によつて名は変わるが、小式部内侍やら中将内掌、右衛門内侍等の名を名乗る。以上が先に述べたお局様で、この下に「命婦」がいる。この職は地下（殿上人でない人）の従三位以上の人の娘が選ばれるところで、下鴨、上賀茂、平野、春日、日吉、松尾、住吉などの社家（上級神職の家）の娘さんが多く入る。お局は陛下と直に話ができるが、命婦は直に話ができない。お局を通してご返事を申し上げる。この命婦から下を「お下さん」と総称する。命婦の下に女蔵人そして御差がいる。女蔵人は命婦へと出世するが、御差はずっと御差のまま。しかし御差だけは陛下と直にお話することが許されている。なぜかという御差のお役目柄からのことで、陛下のお下の御用を手伝うからである。命婦の一番頭は伊予と名乗り、二番目は大御乳という。あとは大和とか上野とか国名を名乗る。以上の詳細は幕末に一条家の諸太夫を勤めた下橋敬長翁の昔語りに記録されているのでこれによった。なかなか有職故実とはむずかしいもので、本だけでは解りにくい点が多すぎる。ついでだから申し上げておくが、陛下のことは宮中で「お上」と申されるが、そのイントネーションは少し変わったものであったという。ところがこれが今も東大寺に遺っており、坊さんのことを「オカミ」と尊称するが、やはり独特のイントネーションであるのが面白い。

閑話休題、再び御祈禱の話へ戻ると、お上の御祈禱は私的な形を執つて出る。命婦などが親元の神社との関係で依頼する。その命を受ける家は春日でも三軒ほどに限られ、御内儀からの消息を受け取るとすぐに菊の紋のついた提灯を持って京上（上京のことをいう）する。その辺の詳しいことは大正頃に官幣大社春日神社の森口奈良吉禰宜が最後の若宮神主を幕末から明治初年に勤めた、千鳥祐順翁の昔語りを筆記した『衛翁閑話』より御紹介しておこう。

「御撫で物と申しまして、禁裡の御祈禱を致しましたのは、毎年十二月に二重の箱に入れた物を御封のまま御預かりをして、翌年の十二月にその御引替への御通知を受けて、それを又禁裡へ御

返納申し上げるのがありますが、時には臨時に御沙汰がありまして、それを御預かり致しまして、御祈禱をすることもあります。この時の御通知は、御消息と申しまして大内侍の御局様から、其の關係の社家へ御消息が参ります。この御消息は神社の古文書の内には最近のものが一二枚ほど残ってありました。私の家にも沢山にありましたが、大方は反故に致しました。此の御消息の参りました時には風雨寒暑に拘らず、直ちに準備を整へて出掛けるので、万一にも御封を毀損する様な事でもありましたならば、直ちに御咎めを蒙り、其輕重によりましては、遠嶋流罪に処せられたのでありますから、中々に慎重に取り扱ったものであります。この御撫物は私の知って居ります家では中・富田・そして私方とだけで外にはありませんでした。是は始終家に守護致しまして、社頭へは持つて参りません。最も道中は禁裡御用といふ絵符を立てまして白木の唐櫃或いは両掛けに昇かせるのであります。人足は宿場宿場から、木津、玉水、長池、宇治、伏見、京といふ風に人足を夫々微発出来たのですが、夫で居て相当金子がかかったのであります。其時に用います御用の提灯は菊の御紋章で、外箱だけはまだ宅にも保存は致しております」と語られている。現在でも私の後ろにある祭儀課の金庫には、いつお撫物が届いても御祈禱できるよう、御撫物祈禱の秘伝作法を誌したものが丁寧に保管されている。

ここに御披露する古文書は春日社家富田家伝来のもので、明治天皇が江戸へ行幸される道中の安全の祈禱を、お内儀より願ひ出られたもの。事實上これが遷都となり、これを最後に御内儀よりの祈禱消息は二度と再び届くことは無かつたのである。さてこの「お撫物」の中身は秘中の秘とされているので、到底申し上げるわけにはいかない。



明治天皇東京行幸の道中無事を祈る祈禱を申しつけられた際、
到来した宮中の女房からの消息（明治元年九月十八日着）
来ル廿日卯刻東京行幸御出壺の文字が見える